

【標本箱とジパング】

筆者：高橋二郎

中学校の理科か科学の授業で日本産の鉱物について教わりましたよね。課目担当の教諭が言いました。「日本にはとても多くの種類の鉱物が埋蔵されている、珍重されるものも多いが、その量が少ないので鉱物の標本箱のようだと言われる」と・・・。

モータースポーツに関わる仕事を始めた約40年前にふと思い出したのが「標本箱」という言葉。

日本は、他国に例のないほど、とても多種カテゴリーのモータースポーツが行なわれています。地理的に極東の島国ですから、各シリーズは、国内の全日本選手権で行なわれることが大半です。ヨーロッパのように国々が地続きで、国境と国境が接しているのと違って、国々をまたいで選手権が展開することはほとんど無い。海を渡って来た世界選手権シリーズが日本の地で開催されたのは、1970年代も後半になってからです。F1世界選手権シリーズの一戦が日本で初開催された1976年のことは、今でも鮮明に思い出されます。その時はまだ未成年でした。観客として富士スピードウェイで観戦しました。余談ですが、2014年に日本で公開された映画【RUSH ラッシュ/プライドと友情】にその時の富士スピードウェイで行われた日本初のF1グランプリレースがノンフィクションドラマで描かれているので、ご興味のある方は、ご覧ください。とても忠実に当時のピットエリアが再現されています。

話を戻します。日本で行われているモータースポーツカテゴリーは、少年から競技ライセンスが発給されるカートから始まってフォーミュラカー、ツーリングカーのサーキットレース。非舗装路を走るラリー、ダートトライアル。舗装路で行われるジムカーナや手軽に参加できるオートテスト。日本発祥で今や世界に羽ばたいているドリフト。地方選選手権から全日本選手権まで各地で開催されています。一国でこれほど多くのモータースポーツが行なわれている例はほとんど無い。シリーズの規模は小国内で小さいけれど、それぞれが特徴的で競争のレベルが高い。リストアップして並べると世界に誇れる展示ができる。それだから、頭に浮かんだのが日本はモータースポーツの立派な標本箱という言葉だったわけです。



その中でも新参のドリフトはさしずめ、競技として確立された当初は【レアメタル】だったでしょうね。その原石が発見され、磨かれ、時間を経て世界的に普及し、ユニークなモータースポーツ性の高さが認められて、世界のモータースポーツの統轄団体、国際自動車連盟（FIA）の中に2019年1月に委員会が新設されています。その初代委員長に日本人が就任しています。

日本の近代モータースポーツは、半世紀以上の歴史を有しています。かつて20世紀の初頭に海外で日本人が活躍したという例はあるものの、その時代は、自動車を所有すること自体が難しい時代なので例外中の例外。今や世紀が変わって自動車は生活に不可欠な時代となり多くの方がモータースポーツを楽しむ時代へと変化してきています。若者層のクルマ離れが叫ばれていますが、モータースポーツを通して、再びクルマに興味を抱いてくれる方々が増えてくることを期待しています。その活動の一つが東京お台場で毎年行われているモータースポーツジャパン フェスティバル in お台場です。2019年で14回を数えます。毎年たくさんの来場者に足を運んでいただいています。

今年、国内フォーミュラのトップカテゴリー全日本選手権スーパーフォーミュラとその下部の全日本F3選手権で変化がありあます。複数の外国チームが参入してきているのです。

外国人ドライバーが日本のチームでシリーズを戦うことは極当たり前となってきましたが、チームがフルシーズンを日本で戦うのはこれまでなかった。モータースポーツ界にもインバウンドの時代が始まった。かつて標本箱に飛び込んできた外国人ドライバーが、「聞くと、見るとでは、大違い」と日本のモータースポーツのレベルの高さを海外に伝えてくれたからこそ、日本のモータースポーツ人気はとて高くなっているのが現状です。ユーラシア大陸のはずれにジパングとい理想郷が存在するとマルコ・ポーロがヨーロッパに伝えたのと同じ状況が現在の日本のモータースポーツに巻き起こっているのです。





高橋 二郎（タカハシ ジロウ）

1957年 10月16日 東京生まれ・東京在住

職業：フリーランス・モータースポーツ・ジャーナリスト

NOP法人 日本モータースポーツ推進機構 理事

日本モータースポーツ記者会 会長

○現在

J SPORTS モータースポーツ中継、ピットリポーター/解説。

J SPORTSのSuper GTトークバラエティ番組「GTV」（2008年より）メインキャスター

